

# 尾道市持光寺所蔵釈迦八相図について(一)

## 関口正之

### 内容

はじめに

一 現状

二 主題

三 構成と表現の特色

四 釈迦八相図における位置

むすび

### はじめに

広島県尾道市の持光寺には、八幅の画面に釈迦の伝記(仏伝)を描いた作品が所蔵される。仏伝の説話の中から三十余りの事蹟を選び、各幅に数場面ずつを描いて構成している。釈迦の誕生から入滅までの伝記の中で主だった八つを「釈迦八相」、「八相成道」あるいは、単に「八相」と名づけており、これらを含む仏伝を大画面に描くものを「釈迦八相図」と呼び慣らわしている。江戸時代に現在の表具に改められた持光寺本には、それが「八相成道曼陀羅」であると墨書されている。本来、「曼陀羅」は、密教個有の言葉であり、種々の変相図や浄土図までも曼陀羅

の名で呼ぶ用語法を最近では行わず、絵画に關しては密教の曼荼羅圖に限定して用いる傾向にある上に、諸先学が指摘しておられるように、

「釈迦八相図」という語が広く仏伝圖を指す名称として使われ、大画面の作例に対してはむしろ「仏伝圖」より一般的であるので、持光寺本も他の作例に合わせて「釈迦八相圖」と呼んでも差し支えないであろう。

釈迦八相の八つの事蹟については、諸経がそれぞれ異った八つを説くが、現在一般に度々例に出されるものは、下天・託胎・降誕・出家・降魔・成道・轉法輪・入涅槃の八つである。<sup>(2)</sup>日本では奈良時代に既に卷子形式の過去現在因果經(醍醐寺本外、国宝)が作られており、大画面に描いた例としては、奈良・薬師寺の三重塔東西兩塔の中に八相の説話が半分ずつ表わされていたことが、大江親通の『七大寺日記』に見える。<sup>(3)</sup>十二世紀初頭の薬師寺三重塔内部の有様を伝えているのであるが、わが国では早くから仏伝が絵画化されていたことがうかがえる。また、十一世紀に藤原道長が建立した法成寺金堂扉に八相成道が描かれていたことが法成寺金堂供養記に納められた藤原広業の願文の中に記されているので、<sup>(4)</sup>大画面の釈迦八相圖は平安時代には多数制作されていたと考えられる

が、平安時代以前の大画面形式の作例は残されていない。これまでに知られている、掛幅などの大画面の作品は、次に挙げる五例にすぎない。

三重・大福田寺藏釈迦八相成道図一幅(重文)

根津美術館藏釈迦八相図一幅(重文)

山梨・久遠寺藏釈迦八相図三幅

救世熱海美術館藏釈迦八相図四幅(重文)

滋賀・常楽寺藏釈迦八相図七幅

このうち根津美術館本と久遠寺本は一組のものと言われているので、実際には四組の作品が残されていることになる。この他に、涅槃図の左右両端に細長く仏伝を描いた八相涅槃図が福井・劍神社に所蔵される(重文)。涅槃図の部分は巨幅と言えるが、釈迦八相を描く部分は幅30cmほどしかない。しかし、劍神社本の八相は、各部分の表現が熱海美術館本と似ており、同系統の図柄として注目される。

大福田寺本は八相を一幅の中に納めているので、八相を絵画化した図柄を概観する目安になる。これと比較すると根津本・久遠寺本の組は、釈迦八相図の一部であることは明らかであり、常楽寺本には涅槃を描いた一幅が欠けていると推測できる。熱海美術館本は劍神社本と同系であるからか、下天から転法輪までは描くがそれ以降の仏伝までは描いていない。ところが、持光寺本八幅は、下天から入滅まで釈迦八相の主要な場面は描いているから、現存の八幅で一揃いの作品であったと考えることはできる。しかし、一部分しか現存しない、奈良時代の絵因果経に一四〇余の場面が細かく絵画化されていることを考えると、持光寺本に八幅以外の作品が無かったと断言はできない。ここでは持光寺本の延宝三

年の修理銘にある「八軸」という墨書が、当初の姿を伝えるものと考えられることにする。

釈迦八相図のように一画面の中にいくつもの説話を表現する形式は、本生や仏伝を表わしたインドの浮彫や、中国の画像石・石窟寺院壁画に古くから用いられている。従って、わが国へは早くからこのような画面形式の説話図が登場してもよい筈であるが、既にのべたように平安時代以前の掛幅の釈迦八相図は伝わらず、現存作品はすべて鎌倉・室町時代に描かれたものばかりである。鎌倉・室町時代に入ると、社寺の縁起絵、高僧伝絵、中でも聖徳太子信仰の高まりを反映した聖徳太子伝絵など、一幅に幾つもの場面を描き込んだ釈迦八相図と同じ形式の宗教説話図が著しく多く遺されている。これらは、絵画化されるべき主題が、釈迦八相図と同様に年月の経過とともに発生した一連の事件を多数集めて描くことにより、その全容を現すものであるから、古くから存在したであろう釈迦八相図の画面構成が、これら説話図の形式の形成に預って力があつたことは十分に推測できる。こうした説話図が、鎌倉・室町時代に盛んに製作されたことは、物語の細部を劇的に絵画化したものが人々に好まれるほど信仰が新たな方向に転換し始めたことを感じさせる。鎌倉・室町時代の釈迦八相図ばかりが現存しているが、このことも仏教説話図の表現形式が注目される状況が訪れたからこそ、社寺縁起絵・高僧伝絵の形式の祖本ともいべき釈迦八相図の製作が再び行われ始めたことと解釈することができるであろう。

しかし、現存する釈迦八相図は鎌倉時代以降に描かれたものであり、平安時代の釈迦八相図がどのような表現を見せていたのかは想像するほ

かはない。奈良時代の絵因果経と現存する掛幅作品と同じ場面を比較しても両者は直接にはつながらない。平安時代の釈迦八相図は、やはり絵因果経の表現形式とは異り、現存の釈迦八相の系統のものと考えてよいであろう。現存の釈迦八相には完本がないことを考えると、八幅揃いと思われる持光寺本は、釈迦八相図の全体像を考える上で貴重な資料である。

## 一 現 状

持光寺の釈迦八相図は、現在全部で八幅が伝えられ、各幅とも絹本着色三副一鋪、掛幅装の作品である。現在の表具は、各幅の表具裏の軸木部分付近に書かれた修理銘によって延宝三年（一六七五）に改装されたものであることが知られる。改装から約三百年を経た現在、表具の傷みが進み、軸を巻き納めたままの状態で軸端を外部から傷つけられた幅が多く、画面右端が上から下までU字状に連続して画絹まで欠落しているものまである。とくに第一幅の損傷が激しいが、表現を判別し難いほどのものではない。

八幅の表具裏には、八双近くの外題部分と軸木近くの部分、即ち裏面上の端と下端とに墨書がある。釈迦八相のうちの「託胎」を描いた一幅を例にとると、外題部分には

「第一 備州御調郡尾道浦持光寺常住」

と記され、下辺の軸木付近には

「八相成道曼陀羅八軸右裏書永徳三年五月三日再復云云  
自余記録依令破損不能記

延宝三年九月廿五日奉修

復為万人□衆二世安樂也願主任持存世 日輪山」

尾道市持光寺所藏釈迦八相図について(一)

と書かれている。軸木部分のこの修理銘は、「涅槃」を描く一幅が「衆」の字が脱けているほかは同文である。外題部分は、「誕生」を描く一幅が「第二」等と書かれるべき最初の部分が汚損していることと、「降魔」と「涅槃」を描く二幅が、

「浦持光寺常住」

「第八 備州御調郡尾道浦持光寺」

としか残っていない以外は、いずれも同文である。この二幅の場合も他の六幅と文章は異るところは見られないので、延宝三年九月の修理のときに同じ修理銘と題をつけたものと考えられる。

外題の部分には「第一」、「第三」などと書かれるが、各幅の絵の内容を示した題は記されていない。八幅のうちの六幅には「第一」・「第三」・「第四」・「第五」・「第七」・「第八」と書かれるが、残る二幅は順位が記されていた部分が汚れて明らかにしえない。その二幅は「誕生」を描くものと「降魔」を描いたものである。延宝三年の修理のときに本図を八相成道曼陀羅「八軸」と称しているのだから、順位が欠けている「誕生」と「降魔」の二幅は「第二」と「第六」であったと推測できる。持光寺本は、「第一」に「託胎」が描かれ、最後の「第八」には釈迦八相の最後の説話である「涅槃」が描かれており、仏伝が順に表わされていると考えられるので、誕生を描く一幅が「第二」、降魔を表した一幅が「第六」となっていたと考えて誤りはないであろう。この順に従い法量を示すと次頁の通りである。

本図の伝来については、現在の表具の裏に記された以上のことは未詳である。

(縦) (横) (中央絹巾)

一 (託胎)	一一三・五 cm	一一九・四 cm	四一・一 cm
二 (降誕)	一一三・九	一二〇・四	四〇・五
三 (試芸)	一一三・二	一一九・九	四三・〇
四 (出家)	一一四・六	一一九・六	四二・〇
五 (牟度叉)	一一四・二	一二〇・七	四二・〇
六 (降魔)	一一三・一	一一九・六	四二・五
七 (転法輪)	一一四・一	一一九・八	四二・〇
八 (涅槃)	一一五・二	一二〇・一	四二・〇

## 二 主 題

現存作品を比較すると、各作品とも絵画化すべき場面は、細部において取捨選択が行われたことがわかる。卷子本の絵因果経に比べ極端に少ない場面を配置して構成する大画面の釈迦八相図が、仏伝の中のどの情景を取上げているかを確認することにより持光寺本の特色の一端を明らかにすることができる。そこで第一幅から順に各場面を検討する。

## (一) 第一幅

「第一」と書かれた一幅の画面は、三つの部分に分けられる。上段は、我々から見て右上(以下、本稿においては、画面の「左」・「右」は我々から見ての左右を指すものとする)に翼廊のある宮殿が見られる。中段には、いくつもの楼閣をもつ建物を大きく描き、上段左方に雲間から頂きを見せる遠山を表す。画面下辺は、象や馬が牽く三台の豪華な車とそれに従う人の行列が画面の横幅一杯に描かれる。車の中には一人ずつ人の姿が見え、行列の先頭には旗を捧げて象に乗る武士が三騎、画面右端を下から

中段まで上にあがる。画面中央より少し上方の虚空に、右上の宮殿を出て中段左側の建物に向う騎象の菩薩が描かれ、菩薩の額から発せられた二本の光が、建物の中で柱にもたれる姿勢の人物にまで届いている。象は白象であり、建物内の人物を指して天から降りて来る光景は、仏伝の初めの「託胎」場面に用いられる定型化された表現である。劔神社本・救世熱海美術館本・常楽寺本に託胎の場面が表されているが、この三例には、いずれも白象だけが雲に乗って下降して来る様子が描かれており、法華来儀図にみる普賢菩薩のように白象に乗る菩薩像の降下を表現した例は持光寺本だけである。しかし、後漢に漢訳された『修行本起経』では「空中有乗白象」とあり、呉の支謙は『瑞応本起経』において「化乘白象」と訳しており(資料一)、騎象の菩薩像を描くことを作者が思いつくことは不自然ではないであろう。古い時代には簡潔に訳出された説話も、後代に新たに詳しい記述の経典を見出して漢訳している。宋代に法賢が訳した『仏説衆許摩訶帝経』には、「菩薩乘六牙白象」と明記されており、これを絵画化するとすれば持光寺本のような表現に近くなることは当然であろう。従って、「第一」幅は、『仏本行集経』が詳説するように、護明菩薩として兜率天に生れていた釈迦が、そこでの徳を積み終えて白象となって兜率天から下界に降り、浄飯王の王子として摩耶夫人の胎内にうつる「下天」・「託胎」の光景を描いたものといえる。故に、画面の右上に雲の間から現れた建物と池とは、兜率天の世界と兜率天宮であり、画面中段の宮殿は、父浄飯王の迦毘羅城を、白象と菩薩が向う城内にいる人物は託胎を夢に見る摩耶夫人であろう。なお、大福田寺本では託胎は、象を描くかわりに雲に乗る菩薩を描いている。摩耶

夫人がいる城内の左側には、庭に伺候する二人から話を聞く、国王らしい人物が描かれる。これに似た光景は、劔神社本・救世熱海美術館本・常楽寺本において、やはり託胎の近くに表されているので、摩耶夫人が見た夢を告げられた浄飯王が、婆羅門に夢占いをさせた説話を描いていると考えられる(資料二)。

画面下段に描かれた行列は、他の釈迦八相図の中に類似の表現を見出し、難いほど力を注いで大きく表わしている。類似の表現は、常楽寺本第二幅「住胎宮」の下辺部分に見られる。これは、兜率天から降りて来た太子が、誕生までの期間、摩耶夫人の胎内にとどまっていたことを、胎内という一つの宇宙に住んでいたと見做し、その世界に出遊する太子一行の行列を描いている。<sup>(5)</sup>しかし、本図においては、象や馬が牽く車が並び、いずれにも高位の人物らしい顔がのぞく。その車はどれも豪華な車に描き、太子の従者とするには適しくない。しかも、行列を先導する先頭の武將は、迦毘羅城に向うように左方に進路を反転させていることを考えると、諸経に説くように(資料三)摩耶夫人の太子懐妊の吉報を聞き、迦毘羅城の浄飯王のもとへ朝賀に集まる周辺諸小国の王達の行列を描いたと考えてよいであろう。これまでに紹介された釈迦八相図の中に朝賀の表現が指摘されたことはなかったが、劔神社本・熱海美術館本・常楽寺本には朝賀の場面ととれる描写が認められる。

## (一) 第二幅

「第二」と記されたものはないが、誕生等を描いた一幅がそれに当たると考えられる。画面は、上下二つの説話に分かれている。

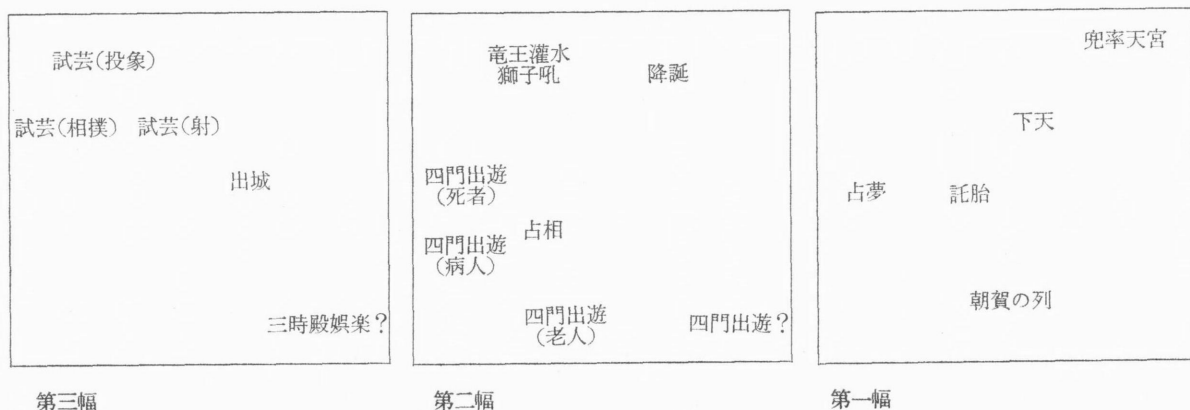
画面上部は、幅一杯に二つの説話が並ぶ。右には藍毘尼園での釈迦誕

生を描き、左には誕生のとき「天上天下唯我為尊」の獅子吼と、その姿の太子に竜王が水を注ぐ場面を表わす。二尊の竜王が温水と冷泉を太子に雨ふらせたという表現は、仏伝関係のすべての経典に説かれているわけではないが(資料五)、現存する釈迦八相図で誕生を描くものにはいずれも表されており、竜王が、釈迦の誕生を絵画化するときに如何にも適わしい、劇的な役割をはたしていることがうかがえる。

画面下半は、白壁の屏に囲まれた宮殿を右に寄せて大きく描き、屏の外に四台の車を配置する。画面下辺中央では、馬車の前に杖にすがって立つ二人の老人と車上の人物とがお互いに顔を見合せており、それより左上の画面左端では路上の仮小屋に臥す人物の傍に来た車を描き、画面左端中央には、一つの荷を四人で担いで山中に去るところを車の中から眺める人物を表現している。現存の釈迦八相図と比べると、外出の姿は馬に乗ったり車を使うなど様々であるが、老人や病人の表現はよく似ているので、この図は、老・病・死というこの世の無常の相を太子が初めて目にする事になった「四門出遊」を表したと考えることができる。

左端中ほどの四人は棺を運ぶところを描いたと考えられる。これと似た光景を描く例は大福田寺本しかない。経典では「四門出遊」は、東門を出て老人に会い、南門を出て病人に、西門を出て死者に、北門を出て比丘に会ったと記されるものが多い(資料一二)。この四者をすべて表す作品は、やはり大福田寺本のみで、熱海美術館本は老人・病人のみを描き、常楽寺本は門外で病人に会うところだけを描いて「四門出遊」の場面を代表させている。本図には、門外の下四ヶ所に乗り物の車を配し「四門」を忠実に表現するように見える。このうち、老人・病人・死者が描

挿図1 釈迦八相図配置



かかれていることは、他の作例のこの

部分の表現や経典の記述から認めることができるが、画面右下に表された部分は、北門を出て比丘に会う太子とは解釈し難い。これを描く大福田寺本は、太子と話をした後雲に乗って去る比丘を描く。本図では太子は車の中から建物の中に身体を寄せる四人の人物と向い合う。太子の乗る車の背後には白雲が湧き上がっており、現存の釈迦八相図の中には類似の表現が見出せないものである。屏に囲まれた宮殿の室内には、対坐する二人の人物が描かれる。やや奥に居て顔をこちらに見せる人物は、冠をつけているから浄飯王と考

第一幅

えることが許されるであろう。王の前に伺候する人物は年輩の男性を描いたように見えるので、太子の観相をした阿夷（或いは知相婆羅門、善相婆羅門、阿私陀仙などと訳される）が、太子は転輪聖王か仏、恐らく仏になるであろうと王に報告する場面である

第二幅

と見ることが出来る（資料六）。従って、本図は「誕生」と「四門出遊」という、仏伝の中にあつては年代的に少し離れすぎる説話を一幅にまとめたものである。釈迦八相図の中では、熱海美術館本（四幅）が一幅の中に「誕生」と「四門出遊」を描いているが、久遠寺本（三幅）も常楽寺本（七幅）も、この説話を同じ画面の中に併せ描いてはいない。これは持光寺本の特色の一つと考えてよいであろう。

（三） 第三幅  
「□三」と書かれる一幅は、画面左上の部分に長い屏を前にした相撲・射技を描くところと、宮殿内を俯瞰して描く右下部分との二つの説話から構成される。

左上は、屏の前にいる象の鼻を両手でつかみ、今にも振廻そうとする姿勢の人物と、屏の上方へ高々と象を投げ上げた人物とを上の方に並べる。そのすぐ下には相撲をとる二組の人物を左側に、弓を射る二人をその右に描く。弓の的は、縦に並べられた七頭の象と七個の太鼓である。これは少年時代の悉達太子が調達（提婆達多）と技を競べたところ抜ん出て優れていたことを描いており、仏伝を説く諸経典には必ず説かれる著名な場面である。現存作品では、大福田寺本・久遠寺本・常楽寺本には、本図と同様にこの三つの技競べが一つの場面の中にまとめて表されている。しかし、持光寺本以外の三例は、弓の的には単に太鼓を数個並べるのみで、本図のように動物を並べて的にする表現はない。ところが『仏本行集経』（隋訳）では的に「鉄猪之形」をも用いたことが記され、『方广大莊嚴経』（唐訳）や『仏説衆許摩訶帝経』（宋訳）にも「鉄鼓」の他に七重の「鉄猪」を射抜いたことを説いている（資料八C）。持光寺本は

「鉄猪」の的に相当するものを表現しているに相違ないが、的に並ぶ動物は鼻を長く描いているので象にしか見えない。

画面下半は、廻廊を大きくめぐらした宮殿を配し、画面の右側中央に、宮殿の中庭から白雲に乗って虚空を駆け登る騎乗の人物を表す。これは出家を決意した太子が従者車匿にひき出させた白馬健陟に乗り、夜半に城を抜け出すところで、他の現存作例にも皆描かれた場面である。

城内中央には車匿によって太子の前に連れてこられた白馬が太子の出家を感じて悲しみ暴れるところ、城内左側には太子の出城を皆に知らせようとする人物（恐らく車匿<sup>(6)</sup>）、太子一行が城門を飛越えた下辺の城内には、太子の姿が見えないのに気付き太子を捜すかのような二人の人物を描く。画面右下隅には二人の舞人が見える。この二人は太子の出家を止めようとして父王が建てた三時殿にいる伎女達か、或いは太子の出家をたたえる諸天を表すものであろう。この場面は、諸経に説かれ、現存作品のどれにも描かれる重要な場面である。従って、第三幅は「試芸」と「出城」を描いた一幅である。試芸と出城を組合せて描く例は、大福田寺本と久遠寺本があり、持光寺本は久遠寺本に近い。熱海美術館本は出城する太子一行だけを描き、常楽寺本は、三時殿の娯楽を表す城内と、四門出遊のうちの病人に会うところを城壁の外に描いてしまい、その城内から出城するかのように霞をひいて画面を合せている。なお、仏伝の順に従えば、本図の「試芸」と第二幅の「四門出遊」は入れ替るものである。久遠寺本や本図の表現は、手本となった作品の存在を推測させる。

(未完)

註

(1) 梅津次郎『日本の説話画』、京都国立博物館、昭和36年4月。

(2) 望月信亨『仏教大辞典』(昭和12年8月)四二五―六頁「八相」の項。

中村元『仏教語大辞典』(昭和50年2月)の「八相」の項(一一〇九―一〇頁)も同じ八つを挙げる。但し、名称は降兜率・托胎・出胎・出家・降魔・成道・転法輪・入滅(入涅槃)である。

(3) 大江親通『七大寺日記』(藤田経世『校刊美術史料・寺院篇上巻』26頁)

(4) 『群書類従』第15(釈家部)279頁上「每扉書八相成道変」

(5) 唐・地婆訶羅識『方広大莊嚴經』卷第二、処胎品第六「爾時世尊告阿難言。汝等当觀仏在胎時所居宝莊嚴殿。……世尊爾時即為阿難釈提桓因及四護世并余天人、顯示如来処胎之時宝莊之殿。」(大正藏經3―551上)。

(6) 『過去現在因果經』卷第二には次のように記されている。即ち「爾時車匿。举声号泣。欲令耶輸陀羅及諸眷屬。皆悉覺知。」

#### 〔資料〕

持光寺藏釈迦八相図に描かれた個々の場面について、諸經典の記述は如何に表現しているかを絵画と比較するために、大正新修大藏經第三・四卷(本縁部上下)に納まる經典から次の十種を選び、主題ごとに列記する。經典名は、上に付した数字を以て表し、末尾に記す「3―468中」は、大正藏經の第3巻468頁中段に、その項が存在することを示す。なお、引用文の中の現在使われていない文字については、当用漢字で代用したものがあつた。

- 1 後漢・竺大力共康孟詳訳『修行本起經』二卷
- 2 吳・支謙訳『仏説太子瑞応本起經』二卷
- 3 西晋・竺法護訳『仏説普曜經』八卷
- 4 西晋・聶道真訳『異出菩薩本起經』一卷
- 5 北凉・曇無讖訳『仏所行讚』五卷

6 劉宋·求那跋陀羅識『過去現在因果經』四卷

7 隋·闍那崛多識『仏本行集經』六十卷

8 唐·地婆訶羅識『方廣大莊嚴經』十二卷

9 宋·法賢識『仏說衆許摩訶帝經』十三卷

10 宋·釈宝雲識『仏本行經』七卷

一 託胎

1 卷上·菩薩降身品第二「夢見空中有乘白象。光明悉照天下。」(3-463中)

2 卷上「菩薩初下。化乘白象。冠日之精。因母昼寢。而示夢焉。從右脇入。」(3-473中)

3 卷第二·降神処胎品第四「菩薩便從兜率天上。垂降靈威。化作白象。口有六牙。……。降神于胎。趣於右脇。」(3-491上中)

4 「即下入王夫人腹中。」(3-618上)

5 卷第一·生品第一「於彼象天后 降神而処胎」(4-1上)

6 卷第一「即乘六牙白象。発兜率宮。……。以四月八日明星出時。降神母胎。于時摩耶夫人。於眠寤之際。見菩薩乘六牙白象騰虛而來。從右脇入。」(3-624上)

7 卷第七·俯降王宮品第五「是時大妃。於睡眠中。夢有一六牙白象。其頭朱色。七支挂地。以金裝牙。垂空而下。入於右脇。」(3-683中)

8 卷第二·処胎品第六「菩薩是時從兜率天宮没。入於母胎。為白象形。六牙具足。其牙金色首有紅光。形相諸根悉皆圓滿。正念了知。於母右脇降神而入。聖后是時安穩睡眠。即於夢中見如斯事。」(3-548下)

9 卷第二「觀見菩薩乘六牙白象。下兜率天処摩耶腹。」(3-938下)

卷第三「爾時摩賀麻耶。作四種夢。一夢白象口有六牙。二夢白象從天來下入於腹中。三夢自身上大高山。四夢衆多豪貴大人俱來拜跪。」(3-939上)

10 卷第一·降胎品第三「大白象王有六牙忽然來至在我前」(4-58上)

一 占夢

1 卷上·菩薩降身品第二「便召相師隨若耶。占其所夢。」(3-463中)

2 卷上「王即召問太卜。占其所夢。」(3-463中)

6 卷第一「即便遣請善相婆羅門。以妙香花種種飲食而供養之。供養畢已。示夫人右脇并說瑞相。白婆羅門言。願為占之。」(3-624中)

7 卷第七·俯降王宮品第五「時淨飯王。召一宮監内侍女人。而告之言。汝速疾來至外宣勸語我國師大那摩子。令急追喚八婆羅門師。及大那摩國師之子。」(3-683中下)

8 卷第二·処胎品第六「時輪檀王。聞婆羅門解夢因緣。」(3-549中)

9 卷第三「王以此夢問其相師。」(3-939上)

10 卷第一·降胎品第三「王聞后所夢 …… 即召梵志占」(4-58上)

三 朝賀

1 卷上·菩薩降身品第二「於是眾散諸小國王。聞大王夫人有娠。皆來朝賀。各以金銀珍宝衣被花香。敬心奉貢稱吉。」(3-463下)

2 卷上「於是群臣小國王。聞大王夫人有娠。皆來朝賀。」(3-473中)

4 「左右群臣。及隣國請可屬迦維羅衛國者。聞王夫人有娠。皆來賀大王。」(3-618上)

四 降誕

1 卷上·菩薩降身品第二「夫人攀樹枝。便從右脇生墮地。行七步。」(3-463下)

2 卷上「化從右脇生墮地。即行七步。」(3-473下)

3 卷第二·欲生時三十二瑞品第五「從右脇生墮。忽然見身住宝蓮華。」(3-495上)

4 「從母右脇生墮地行七步之中。」(3-618上)

5 卷第一·生品第一「誕從右脇生 漸漸從胎出 …… 如從虛空墮」(4-1上中)

6 卷第一「夫人見彼園中。有一大樹。名曰無憂。花色香鮮。枝葉分布。極為茂盛。即举右手。欲牽摘之。菩薩漸漸從右脇出。于時樹下。亦生七宝七茎蓮花。大如車輪。菩薩即便墮蓮花上。」(3-625上)

7 卷第七·樹下誕生品第六上「摩耶夫人即举右手。……。以手執波羅叉樹枝訖已。即生菩薩。」(3-686中)

8 卷第三·誕生品第七「從母右脇安詳而生」(3-553上)

9 卷第三「即以右手攀彼樹枝欲生太子。親諸人衆四辺圍繞示有慙色。天主已知乃作風雨。令彼人衆四散馳走。爾時天主復自化身為一老母。在夫人前欲収太



子。是時太子初出母胎。」(3—939中)

10 卷第一・如來生品第四「從右脇生」(4—58中)

五 獅子吼・灌水

1 卷上・菩薩降身品第二「行七步。举手而言。天上天下唯我為尊。……。積梵四王。与其官屬諸竜鬼神閻叉健陀羅阿須倫。皆來侍衛。有竜王兄弟。一名迦羅。二名鬱迦羅。左雨温水。右雨冷泉。積梵摩地天衣裏之。天雨花香。彈琴鼓樂。」(3—463下)

2 卷上「即行七步。举右手住而言。天上天下。唯我為尊。……。梵積神天。皆下於空中侍。四天王安置金机上。以天香湯。浴太子身。」(3—473下)

3 卷第二・欲生時三十二瑞品第五「墮地行七步頭揚梵音。……。天帝積梵忽然來下。雜名香水洗浴菩薩。九竜在上而下香水。洗浴聖尊。」(3—494上中)

4 「行七步之中。举足高四寸。足不踏地。即復举右手言。天上天下尊無過我者。四天王即來下作礼。抱持太子。置黄金机上。和湯浴形。」(3—618上)

5 卷第一・生品第一「安詳行七步 足下安平趾 炳徹猶七星 …… 応時虚空中 淨水双流下 一温一清凉」(4—1中)

6 卷第一「菩薩即使墮蓮花上。無扶持者自行七步。举其右手而師子吼。……。時四天王。即以天繒接太子身。置宝机上。積提桓因手執宝蓋。大梵天王又持白抃。侍立左右。難陀竜王。優婆難陀竜王。於虚空中。吐清淨水。一温一涼。灌太子身。」(3—625上中)

7 卷第八・樹下誕生品第六下「菩薩生已。無人扶持。即行四方。面各七步。步步举足。出大蓮花。行七步已。觀視四方。……。諸眷屬等。求覓於水。東西南北。皆悉馳走。終不能得。即彼園菩薩母前。忽然自湧出二池水。随意而用。又虚空中。二水注下。一冷一煖。取此水洗浴菩薩身。」(3—687中)

8 卷第三・誕生品第七「不佞扶持即便自能東行七步。所下足処皆生蓮華。……。又於南方而行七步。……。又於西方而行七步。……。又於北方而行七步。」(3—553上中)

9 卷第三「於其四方各行七步。……。時諸天人於虚空中。持白傘蓋覆菩薩頂。又復諸天降二種雨。或冷或温灌頂沐浴。又復空中諸天及竜作天伎樂。」(3—939中)

尾道市持光寺所藏積迦八相図について(一)

10 卷第一・如來生品第四「故行七步 如師子起 足跡印現 喻如七星 ……

大竜王子 …… 細雨香水 敬浴太子」(4—59上)

六 占相

1 卷上・菩薩降身品第二「於是香山有道士名阿夷。……。必当成仏。於我無疑。」(3—464上中)

2 卷上「吾国有道人。名曰阿夷。……。処国當為轉輪聖王。……。而棄家為道者。當為自然仏。」(3—474上)

3 卷第二・欲生時三十二瑞品第五「(阿夷頭) 如我相法。……。処国當為轉輪聖王。……。若捨国出家。為自然仏度脱衆生。」(3—496中)

4 「国中有大道人。年百余歳。大工相人。字為阿夷。」(3—618上)

5 卷第一・生品第一「時彼林中有 知相婆羅門 …… 若習樂世間 必作轉輪王 …… 若処於山林 專心求解脱 ……」(4—1下2上)

6 卷第一「(善相婆羅門) 今此夫人胎中之子。必能光顯積迦種族。降胎之時。放大光明。……。」(3—624中)

7 卷第九・相師占看品第八上「爾時有一阿私陀仙。……。」(3—693中)

8 卷第三・誕生品第七「(阿斯陀) 王自抱持授与仙人。仙人跪捧周辺 觀察。……。」(3—556下)

9 卷第三「時阿私陀。詳觀太子容貌非常。……。」(3—940上)

10 卷第一・阿夷决疑品第六「速呼太子来与阿夷相見……。」(4—60下)

七 三時殿娛樂  
1 卷上・菩薩降身品第二「為起四時殿。春秋冬夏。各自異処。……。五百伎女。挾取温雅礼儀備者。供養娛樂。育養太子。」(3—464上)

2 卷上・同「王問裘夷。太子今有六万姝女。伎樂供養。太子寧樂乎。」(3—466上中)

3 卷第二・欲生時三十二瑞品第五「作三時殿。各自異処。……。選五百伎女。不悅。王即增五百伎女。昼夜娛樂之。」(3—474下)

……各兼数伎。……」(3-496中)

同・四出觀品第十一「(父王白淨)畏之出家宿夜將護。高其牆壁深掘諸壘。更立城門。……。益衆伎女綏女娛樂。令太子悅不懷憂感。」(3-503中)

4 「即為太子。選撰國中名倡妓。得四千人。令千人一番歌樂。昼夜不休息。」(3-618中)

6 卷第一「又復別為起三時殿。温涼寒暑。各自異処。其殿皆七宝莊嚴。……。」(3-627下)

卷第二「王恐憂愁。不樂在家。更增妓女而娛樂之。」(3-629中)

7 卷第十二・掬術争婚品第十三上「時淨飯王為太子。造三時殿。……。」(3-707上)

8 卷第五・感夢品第十四「時輪檀王為菩薩故造三時殿。……。」(3-569下)

10 卷第二・与衆姝女遊居品第八「種種嚴飾。猶如天宮。春秋冬夏。四時各異。……。於是衆女。昼夜作樂。……。」(3-63上)

八 試芸

a 投象

1 卷上・試芸品第三「調達先出。見象塞門。扱之一举。心持即死。難陀尋至。牽著道側。太子後來。……。菩薩慈仁。徐前按象。拳擲城外。象即還蘇更生如故。」(3-465下)

2 卷上「難陀前牽鼻象。掣之至庭。調達力壯。挽而撲之。太子含笑。徐前接象。拳擲牆外。使無死傷。」(3-474中)

6 卷第二「太子便即以手執象。擲著城外。還以手接。不令傷損。象又還蘇。無所苦痛。」(3-628下)

7 卷第十三・掬術争婚品第十三下「左手拳象。以右手承。從於空中。擲置城外。」(3-217中)

8 卷第四・現芸品第十二「爾時菩薩坐於宝輅。以左足指持彼白象。徐擲虚空越七重城。」(3-562下)

9 卷第三「以其一手執持象尾。向空而擲過七重城如投土塊。」(3-942上)

b 相撲

1 卷上・試芸品第三「王告難陀。与太子決。難陀白王。兄如須弥。難陀如芥

子。实非其類。拜謝而退。」(3-455下)

2 卷上「手搏於王前。要不如者。灌之以水。太子慈仁。雖擗昆弟。不令身痛。」(3-474中)

3 卷第三・試芸品第十「調達及難陀欲欲手搏。於時菩薩安穩詳序。愍念之故拳調達身。在於空中三反挑旋。菩薩大慈無所傷害。徐著地上使身不痛。」(3-501下)

7 卷第十三・掬術争婚品第十三下「右手執持提婆達多童子而行。擊拳其身。足不著地。三繞試場。三於空旋。為欲降伏其貢高故。不生害心。起於慈悲。安徐而撲。臥於地上。使其身体不損不傷。」(3-711下-712上)

8 卷第四・現芸品第十二「右手徐捉飄然擊拳。摧其我慢。三擲空中。以慈悲故使無傷損。」(3-564上)

c 射鼓

1 卷上・試芸品第三「彎弓放箭。徹過七鼓。再發穿鼓入地。泉水湧出。三發貫鼓著鉄田山。」(3-465下-466上)

2 卷上「調達雖有高世之才。自然難概。然而自憍。常懷嫉意。請戲後園。的付鉄鼓。俱挽彊而射之。太子每發。中的徹鼓。」(3-474中)

3 卷第三・試芸品第十「時調達射中四十里鼓不能得過。難陀六十里不能越。……。於時持弓授於菩薩。菩薩張弓。弓即折破。菩薩又問。於是城中寧有異弓任吾用不。王即言有。問在何所。王曰。昔吾祖父名曰師子。所執用弓奇異無双。身没之後無能用者。著於天祠。時菩薩言。便可持來。持來授之。……。爾時菩薩執弓注箭。即時放撥。中百里鼓而穿壞之。箭没地中涌泉自出。箭便過去中鉄田山。三千大千刹土六反震動。」(3-501下-502上)

6 卷第二「太子便執七弓。以射一箭。過七鉄鼓。」(3-618中)

7 卷第十三・掬術争婚品第十三下「悉達太子取其祖父師子頰王所用之弓。……。平胸而射。過阿難陀及提婆達多乃至大臣摩訶那摩三人等鼓。……。是時太子。執箭一射。即便穿過七多羅樹。彼箭穿七多羅樹已。箭便墮地。碎為百段。時諸積種。復更別立鉄猪之形。……。太子執箭一射。便穿七鉄猪過。」(3-710下-711上)

8 卷第四・現芸品第十二「射諸鉄鼓悉皆穿過。鉄猪鉄樹無不貫達。箭没於地因而成井。」(3-564中)

9 卷第四「悉達多太子即便随射所有七多羅樹七重鉄鼓及鉄猪等皆悉透過。」(3—942中)  
四門出遊

a 東門

1 卷下・遊觀品第三「始出東城門。時首陀舍天。……化作老人。踞於道傍。頭白齒落。皮緩面皺。肉消脊俴。支節委曲。眼淚鼻涕。涎出相統。上氣肩息。身色蠶墨。頭手脱掉。軀體戰懼。惡露自出。」(3—466中)

2 卷上「始出城東門。天帝化作病人。身瘦腹大。倚門壁而喘息。」(3—474中)

3 卷第三・四出觀品第十一「爾時菩薩出東城門。……於時諸天化作老人。頭白齒落目冥耳聾。短氣呻吟執杖僂步住於中路。」(3—502下)

4 「太子乘車。出東城門。第二切利天王。即化作病疾人在前。腹大身腫。肌肉尽索。著壁而息。」(3—618中)

5 卷第一・厭患品第三「時淨居天王。忽然在道側。變形衰老相。」(4—5下)

6 卷第二「出城東門。……時淨居天。化作老人。頭白背偃。拄杖羸步。」(3—629下)

7 卷第十四・出逢老人品第十六「從城東門。引導而出。……是時作瓶天子。……。变身化作一老弊人。」(3—720上)

8 卷第五・感夢品第十四「從出城東門。時淨居天化作老人。髮白體羸膚色枯槁。扶杖僂偻喘息低頭。」(3—570上)

9 卷第四「爾時太子即乘車騎外於城外。於其馬前見一老人。髮白面皺策杖呻吟。」(3—943中)

10 卷第二・憂懼品第九「始出宮城門。……於是淨居天。……天卒化病人。喘臥在道側。色惡眼睛黃。体氣口焦乾。身腫腹腫脹。惡露諸不淨。宛轉而自塗。」(4—64上中)

b 南門

1 卷下・遊觀品第三「駕乘出城南門。天化為病人。在于道側。身瘦腹大。軀體黃熟。咳嗽嘔逆。百節痛毒。……。」(3—466下)

2 卷上「太子駕乘。出南城門。天帝復化作老人。頭白背偃杖羸步。」(3—474下)

3 卷第三・四出觀品第十一「菩薩駕乘出南城門。復於中路見疾病人。水腹身羸

尾道市持光寺所藏釈迦八相圖について(一)

臥于道側。氣息張口命將欲絶。」(3—503上)

4 「皆勅令太子復乘車出南城門。天王。復化作熱病人。頭面不理。屎尿相塗。還自臥其上。命在呼吸。」(3—618下)

5 卷第一・厭患品第三「天復化病人。守命在路傍。身瘦而腹大。呼吸長喘息。手脚攀枯燥。悲泣而呻吟。」(4—6上)

6 卷第二「爾時太子。百官導從出城南門。時淨居天。化作病人。身瘦腹大。喘息呻吟。骨消肉竭。顏貌痿黃。拳身戰掉。不能自持。兩人扶腋。在於路側。」(3—630上)

7 卷第十五・道見病人品第十八「從城南門。漸漸而出。……爾時作瓶天子。即於太子前路。化作一病人。連骸困苦。水注腹腫。……。」(3—722中)

8 卷第四・感夢品第十四「爾時菩薩與諸官屬。前後導從出城南門。時淨居天化作病人。困篤萎黃上氣喘息。骨肉枯竭形貌虛羸處於糞穢之中受大苦惱。二人瞻侍在於路側。」(3—570中)

9 卷第四「爾時太子即乘車騎出於城外。於其馬前見一病人。形体羸瘦心神劣弱。」(3—943下)

10 卷第二・憂懼品第九「後時復更出。天化作老人。頭如糸雪霧。皮緩肌體皺。戰如水中枝。身儂如張弓。」(4—64中下)

c 西門

1 卷下・遊觀品第三「出西城門。天作死人。扶輿出城。室家隨車。啼哭呼天。奈何捨我。永為別離。」(3—467上)

2 卷上「太子駕乘。出西城門。天帝復化作死人。室家男女。持幡隨車。啼哭送之。」(3—474下)

3 卷第三・四出觀品第十一「太子乘駕出西城門。見一死人。著于床上。家室屈繞拳之出城。涕淚悲哭椎胸呼嗟。頭面塵垢淚下如雨。何為棄我独逝而去。」(3—503上)

4 「太子乘車。出西城門。天王。復化作一老人。羸瘦背偃。拄杖而行。」(3—618下)

5 卷第一・厭患品第三「時彼淨居天。復化為死人。四人共持輿。現於菩薩前。余人悉不覺。菩薩御者見。」(4—6中)

6 卷第二「出城西門。時淨居天。……。即便來下。化為死人。四人拳與。以諸

香華。布散屍上。室家大小。号哭送之。爾時太子。与優陀夷。二人獨見。」(3—630下~631上)

7 卷第十五·路逢死屍品第十九「從城西門出。向於外觀看園林。時作瓶天子。

於太子前。化作一屍。臥在床上。衆人昇行。復以種々妙色芻衣。張施其上。作於斗帳。別有無量無刃烟親。左右前後。圍繞哭泣。……。」(3—723上)

8 卷第五·感夢品第十四「爾時菩薩与諸官屬。前後導從出城西門。時淨居天化

作死人臥於輿上香花布散。室家号哭而隨送之。」(3—570下)

9 卷第四「爾時太子即乘車騎出於城外。於其馬前見一死人。氣絕神逝猶如土木

瓦石無所知覺。男女眷屬圍繞悲哭。」(3—943下)

10 卷第二·現憂懼品第九「後復出遊覽。天化命過人。宗親隨喪車。被髮而啼

哭。」(4—64下)

d 北門

1 卷下·遊觀品第三「敵駕出北城門。天復化作沙門。法服持鉢。行步安詳。目

不離前。」(3—467上)

2 卷上「出北城門。天帝復化作沙門。法服持鉢。視地而行。」(3—475上)

3 卷第三·四出觀品第十一「出北城門。見一沙門。寂靜安徐修梵行。諸根寂定

目不妄視。威儀禮節不失道法。衣服整齊手執法器。」(3—503中)

4 「王復遣出北城門。天王積復化作喪車。中外男女。持幡啼哭。隨車而送之。」

(3—619上)

6 卷第二「出城北門。……。時淨居天。化作比丘。法服持鉢。手執錫杖。視地

而行。……。騰虛而去。」(3—631下)

7 卷第十五·耶輸陀羅夢品第二十上「從城北門引駕而去。爾時作瓶天子。……。

於太子前。化作一人。剃除鬚髮。著僧伽梨。遍袒右肩。手執錫杖。左掌擎鉢。在路而行。」(3—724上)

8 卷第五·感夢品第十四「前後導從出城北門。時淨居天化作比丘。著壞色衣剃

除鬚髮。手執錫杖。……。」(3—571上)

9 卷第四「爾時太子即乘車騎出外遊觀。時兜率天子作是思惟。今茲菩薩出城遊

觀求出家緣。我应当作沙門之相。持鉢乞食現太子前。作是念已。即剃鬚髮身被

法服。手持応器住立馬首。」(3—944上)

一〇 出城

1 卷下·出家品第五「即呼車匿。急令被馬。……。於是車匿。即行被馬。馬便

跳踉。不可得近。……。四神接拳足。令脚不著地。……。太子即上馬。出行詣

城門。諸天鬼神積梵四天。皆樂導從。……。於是城門自然便開。出門飛去。」

(3—467下~468上)

2 卷上「即呼車匿。徐令被馬褰裳跨之。徘徊於庭。念開門当有声。天王維賤。

久知其意。即使鬼神。捧拳馬足。并接車匿。踰出宮城。」(3—475中)

3 卷第四·告車匿被馬品第十三「即勅車匿。起被白馬健陟。……。天帝念知即

時開門。……。於時四神即捧馬足。」(3—507上)

4 「徐呼同日所生倉頭車匿。令轡白馬健德於中庭。車匿即轡馬。太子乘馬欲

去。恐門有声故。徘徊中庭。太子馬行。……。太子不敢開門。四天王即使諸鬼

神。抱持馬足。踰屋出城。」(3—619中)

5 卷第一·出城品第五「被馬速牽來。……。門戶先關閉。今已悉自開。……。

勸已徐跨馬。……。四神來捧足。……。飄然超出城。」(4—10上中)

6 卷第二「車匿即便牽馬而來。……。於是諸天。捧馬四足。并接車匿。積提桓

因執蓋隨從。諸天即便令城北門自然而開。不使有声。太子於是。從門而出。」

(3—633上)

7 卷第十七·捨宮出家品第二十一下「車匿速將乾陟來。……。是時太子乘乾陟

馬。漸向宮門。……。被鉢足等諸夜叉衆。在虛空中。各以手承馬之四足。安徐

而行。」(3—730下~731中)

8 卷第六·出家品第十五「車匿汝今令我生憂憤。宜速疾被乾陟來。是時車匿

白菩薩言。今始中夜未是行時。一切宮城悉皆防衛。誰應於此開諸閤鑰。時積提

桓因。以神通力令諸門戶自然開。……。菩薩於此乘馬王已。初拳步時。十方大地

六種震動。昇虛而行。四天王捧承馬足。」(3—574下~575下)

9 卷第五「是時滄那見是神力。即牽馬王詣菩薩前。……。帝釈梵王与諸天子。

接迎菩薩即出城外。菩薩右辺色界天子善現威儀。菩薩左辺欲界天子手執幢幡。

……。復有天子手捧馬足。瞻仰菩薩一心隨行。」(3—946中下)

10 卷第二·出家品第十一「時淨居天。尋時來下。庄諸侍衛。純昏眠寐。即時普